

令和4年度第4回考古学講座
令和4年(2022)11月26日(土)
かながわ県民センター 2階ホール

神奈川の中世城郭

—小田原城支城を中心に—

神奈川県教育委員会文化遺産課

埋蔵文化財グループ

萩原 滉

はじめに

- ・ 神奈川県下には400ほどの城が知られているがほとんどが高石垣も天守も持たない土造りの中世戦国期城郭。中には残りが良い遺構を有する城もあるが、わずかばかりの遺構をkarouじて保っている城も少なくない。
- ・ 城の基礎的知識
 - 城の基礎的知識として、城を築城するにあたり、キーポイントとなる位置・地勢・役目・構造、また現在目にしている城が築城されるまでに至った歴史について紹介する。
- ・ 小田原北条氏(後北条氏)の支城
 - 後北条氏の小田原城を本城とし、周囲に網目のように支城を配置した。その支城のうち、神奈川県下に位置する三崎城・玉縄城・小机城・津久井城について歴史・現状・縄張・発掘調査成果について触れる。

1. 城とは？

「城」 土を掘り、掘った土を土塁状に盛り上げ外敵から身を守る構築物。

○位置 「堅固三段」の思想で城郭を構築

- ・「国堅固の城」～国内の政略的要地をしめる城。
- ・「所堅固の城」～城郭周辺の地勢からみて要害の地を選んだ城。
- ・「城堅固の城」～城自体が堅固な防備を持つ城。

縄張りはこの思想に基づき城地の選定にかかり、地形に応じ曲輪(郭)の配置を考える。

○地勢

・「山城」 山に築かれた土造りの城。

日本三大山城

→美濃岩村城(岐阜県)、大和高取城(奈良県)、備中松山城(岡山)

・「平山城」 低い山や小高い丘とその周囲の平地を利用して築かれた城。

日本三大平山城

→姫路城(兵庫県)、松山城(愛媛県)、津山城(岡山県)



美濃岩村城(岐阜県)

姫路城(兵庫園)



・「平城」 平地だけを利用して築かれた城。

日本三大平城

→松本城(長野県)、二条城(京都府京都市)、広島城(広島県)

・「水城」 水運を押さえるため海に直面して築かれた城。

日本三大水城

→今治城(愛媛県)、高松城(香川県)、中津城(大分県)

○附近の要地

山嶽丘陵、川沢湖沼、海洋、港湾、島嶼、巖崖等



松本城(長野県)



今治城(愛媛県)



山嶽丘陵(春日山城)

川沢湖沼(鉢形城)





港湾(三崎城)



島嶼(能島城)

○役目

- ・「本城」 大名や国衆・武将などが普段から居住していて、領地を治めるセンターとなる城。「居城」「根城」ともいう。
- ・「支城」 領地を守るために本城の周囲に築いた城。「枝城」「出城」「端城(はじろ)」ともいう。

- ・「境目の城」 敵方との領地との境界に位置する城。
- ・「詰城(つめのしろ)」 本城で敵を防ぎきれなかった時に立てこもる城
- ・「繋ぎの城」 兵糧を運んだり、伝令が行き来するための中継ポイントとして利用する城。負傷した兵士たちを收容して態勢を立て直す場所でもあると考えられる。

- ・「対の城」 敵の城に対抗して築く城。
- ・「付城」 敵の城を包囲するための足掛かりとして臨時に築く城。
- ・「陣城(じんじろ)」 陣を敷いた場所の守りを固めて城のようになったもの。
- ・「砦(とりで)・墨」 応急で築いたごく小さな施設。

2. 城の歴史

- 古代以前の集落と城柵

- ・弥生時代には、濠をめぐらせた環濠集落や山などの高いところにつくられた高地性集落が数多く存在。ヤマト政権に至る政治的統一が進むにつれて衰退。

- ・朝鮮半島との関係から大野城(福岡県)や鬼ノ城(岡山県)など文献に見えないものも含め、多数の城が九州北部から瀬戸内海沿岸に築かれた(古代山城)。



環濠集落(吉野ヶ里遺跡)

古代山城(鬼ノ城)



- ・城の文献上の初見は、664年に天智天皇が築かせた水城(みずき)。
- ・7世紀後半から8世紀前半になると、中国大陆の長安や洛陽などの古代都市をまねた都城が築かれた(藤原京・平城京)。
- ・蝦夷との戦争が続いた東北地方では、7世紀から9世紀にかけて多賀城や出羽柵(でわのき)、秋田城などの軍事拠点と行政拠点を兼ねた城柵が築かれた。



水城・大野城(福岡県)



秋田城(秋田県)

中世の館と山城

○平安時代末期から鎌倉時代

・平常の居館(方形館)・野戦的臨時築城。

・戦期間が短く、単純かつ平地戦であり、進路を遮断するために堀や搔盾・逆茂木などを設置した防塁等が用いられたか。

→宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡(清川村)・阿津賀志山防塁(福島県)など



**宮ヶ瀬遺跡群
表の屋敷遺跡
(清川村)**

阿津賀志山防塁(福島県)





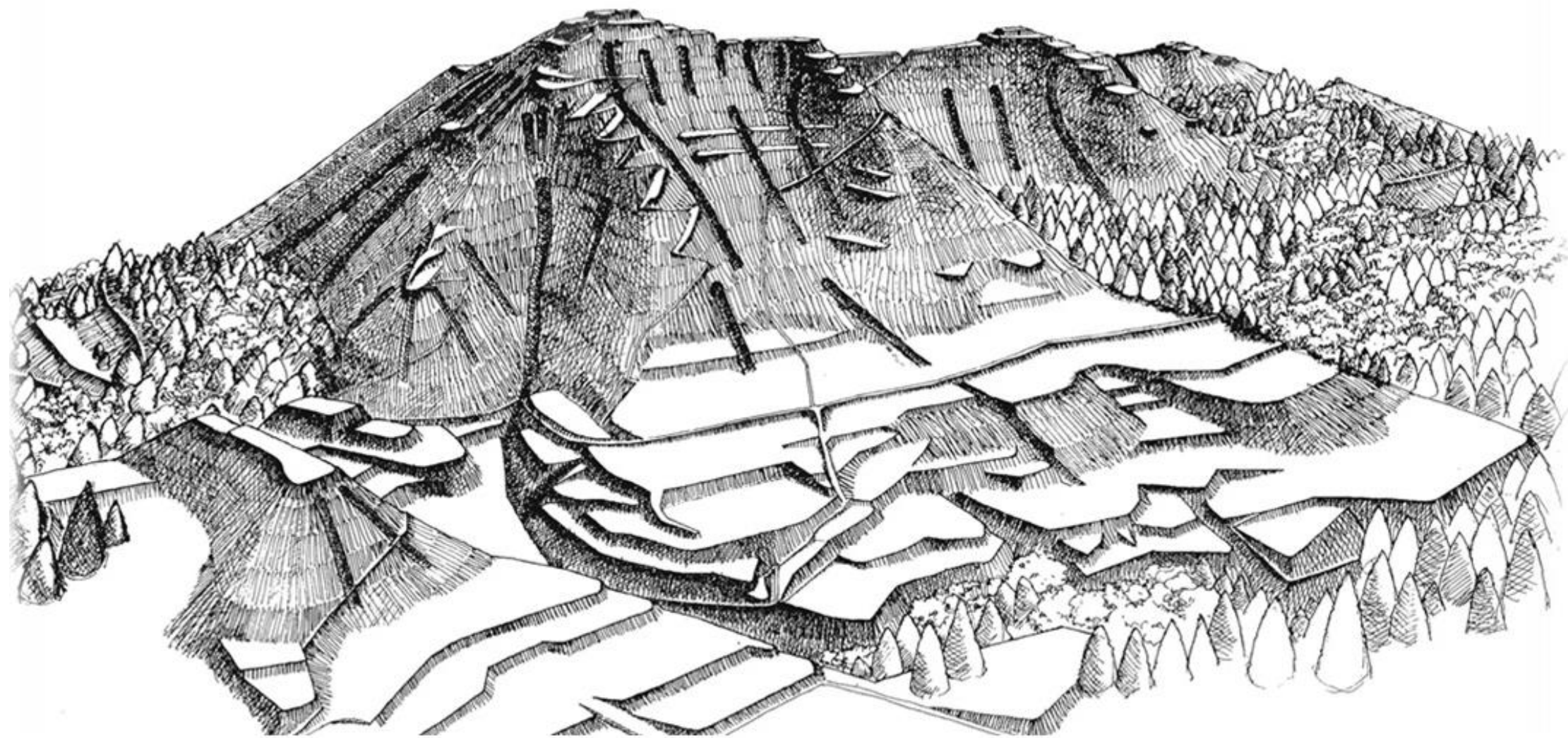
宮ヶ瀬遺跡群長福寺跡(清川村)兜鉢



宮ヶ瀬遺跡群長福寺跡(清川村)
ウズマキかわらけ

○南北朝時代から安土桃山時代(戦国)

- ・山城築城の全盛期。
- ・臨時築城から半永久築城・永久築城となり、本城の周囲に支城が築城される。
- ・領主の居館は、山城が所在する山の麓に建てられ、外敵に攻められた際、要害堅固な山城(詰城)へ籠り、防御拠点とした。
- ・麓に建てられた居館(根小屋)は周囲に堀を巡らし、門に櫓を配置するなど、実質的に城としての機能を備えていた。
- ・山城と根小屋→根小屋式山城
- ・周囲には、家来の屋敷や農町民の集落が形成された(原始的な城下町の形成)。



津久井城(相模原市)

- ・戦国時代中期から城の数は飛躍的に増大。
- ・室町時代末期以降、曲輪全体に石垣を積み、寺院建築や公家などの屋敷に多用されていた礎石建築に加え、壁に土を塗り籠める分厚い土壁の恒久的な建物を主体として建設され、外観も重視して築かれたものが現れる(多聞山城、岐阜城、安土城を築城頃か)。
- ・防御には優れるが政治的支配の拠点としては不向きであった山城は数が減っていく。

- ・中世から近世へ

- ・平山城→城主の平常の居館と戦時の軍事防衛の機能を重視して築かれる。

- ・平城→政治上の利便性を重視して平地に築かれる

- ・織田信長による天正4年(1576)に安土城の築城から近世城郭の建築が本格化。

- ・豊臣秀吉により大坂城や伏見城などが築かれ、重層な天守や櫓、枡形虎口を伴う城門に代表される、現在見られるような「日本の城」が完成。→織豊(しょくほう)系城郭

- ・織豊系城郭は織豊政権の旗下の諸大名が主に建設。
- ・織豊系の城では、これまで城館の周囲には定住のなかった商工業者たちを、城に接する街道沿いの指定区域に配置。領国の経済拠点として都市を設置した。→城下町の形成
- ・豊臣政権や江戸幕府は、天下普請として政権が直轄する城の築城を、各地の大名に請け負わせた。→織豊系城郭の技術が諸大名に広まり、各地に織豊系城郭の要素を取り入れた城が多く現れる。
- ・徳川家康による元和元年(1615)の一国一城令と武家諸法度→城郭の制限が行われるようになる。



大阪城石垣(秀吉期)



安土城大手道

3. 城の構造

○縄張とは？

・「縄張」 城地の選定後、地形に応じて構造物（堀・土塁・曲輪）の位置を設計（＝グランドプラン）すること。または、城全体の構造。

・「縄張図」 現状の遺構から曲輪や防御施設の配置を読みとり、城の構造をわかりやすく示した平面図のこと。



小田原城下絵図(正保城絵図)

○縄張の工夫

・「虎口」 城の出入り口。「小口」→「虎口」

食い違い虎口 防御力を高めるために、通路を屈曲させた虎口。

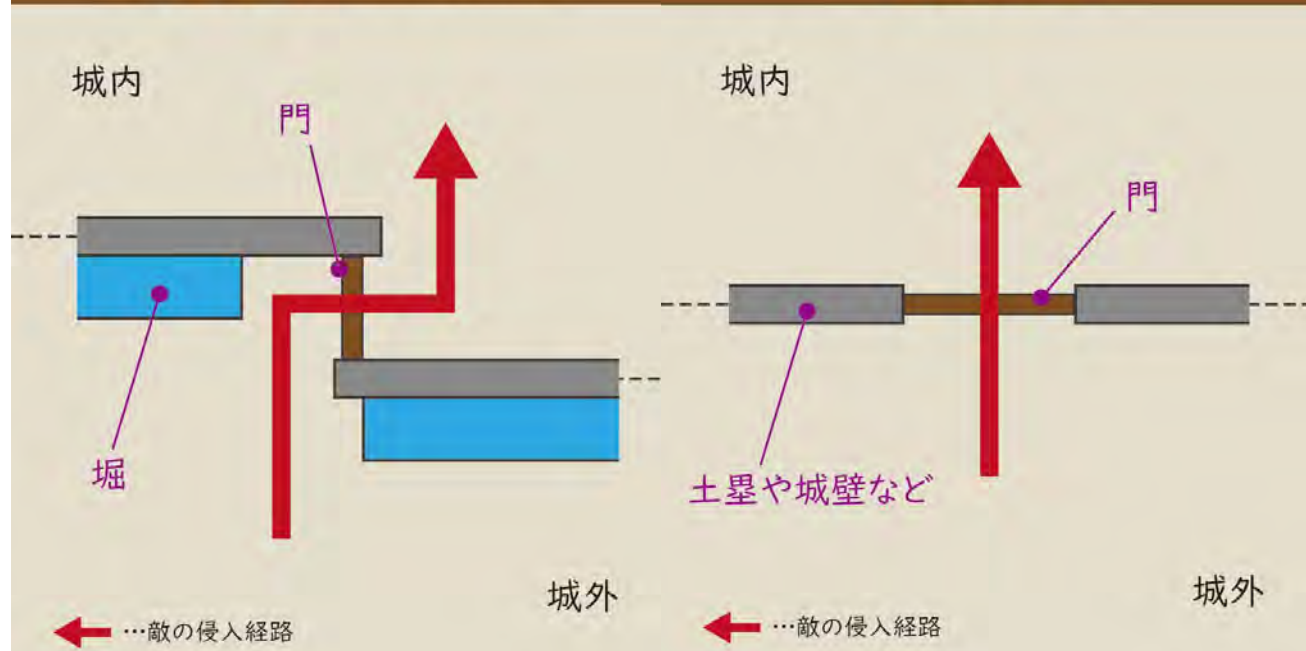
平入り虎口 屈曲させていない直線の虎口。

枳形虎口 虎口内外に方形の区画を設けた虎口。「外枳形虎口」「内枳形虎口」など。

・横矢掛(よこやがかり) 側面防備の方法で城壁に屈曲を設け枳形とからめて構築する場合もある。隅が四角に出張って側面からの攻撃、防御に適している。

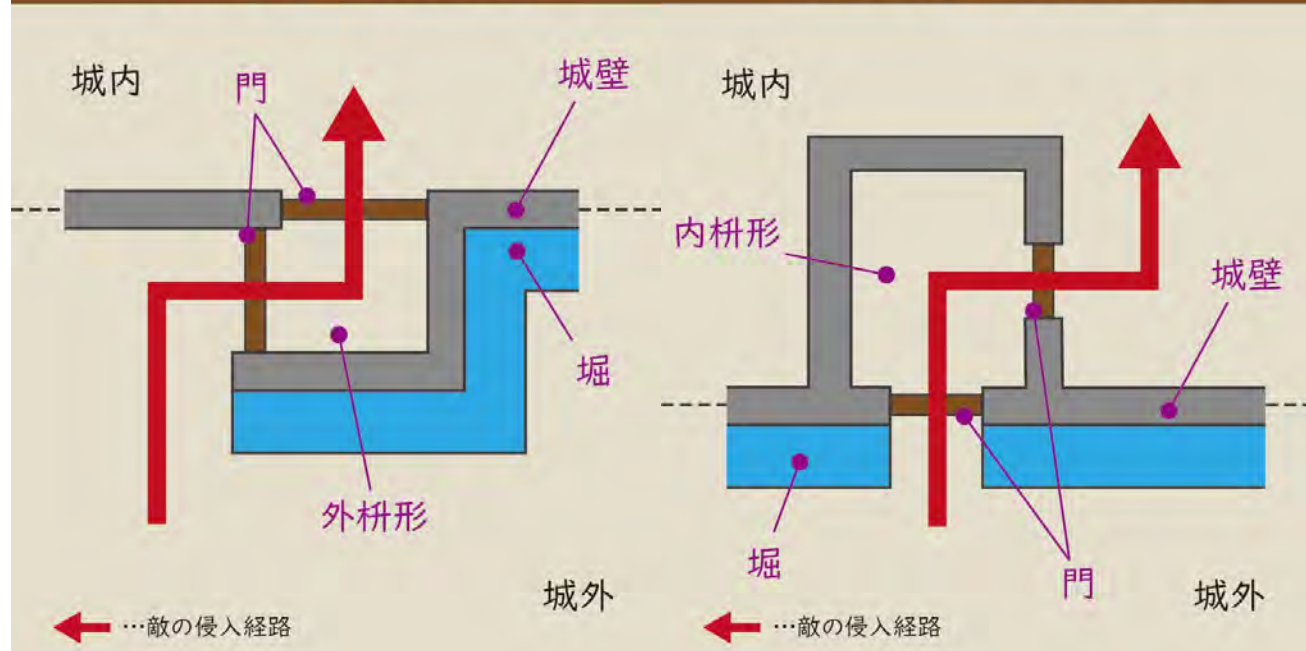
食い違い虎口 (くいちがいくぐち)

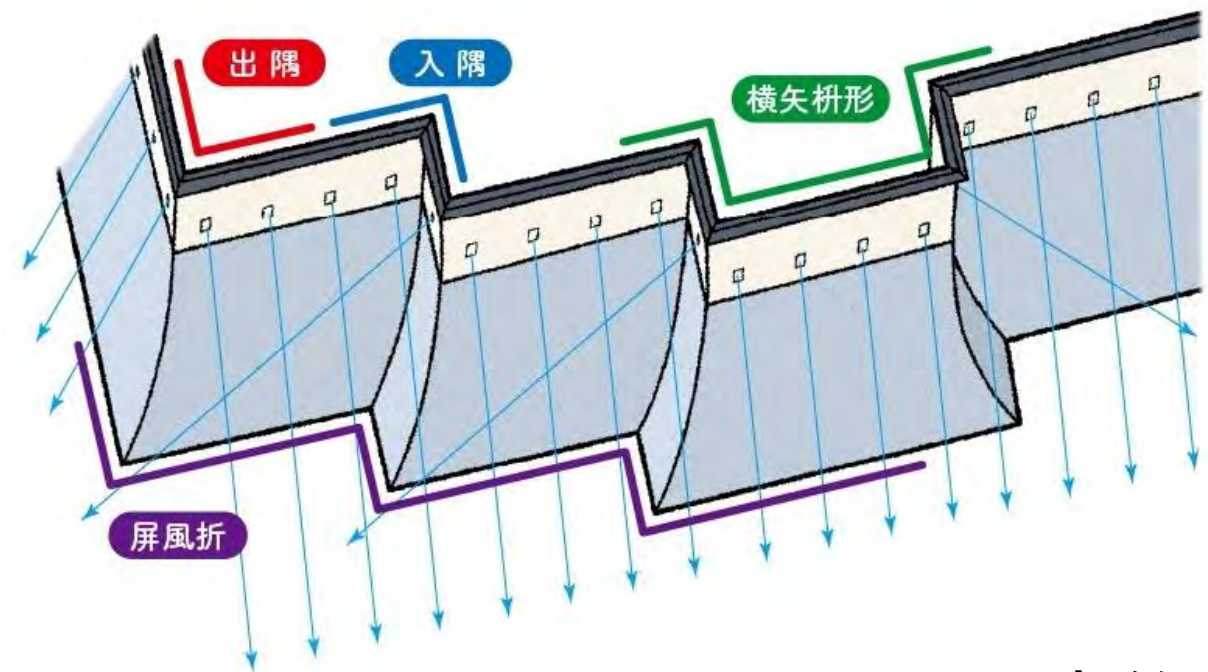
平入り (ひらいり)



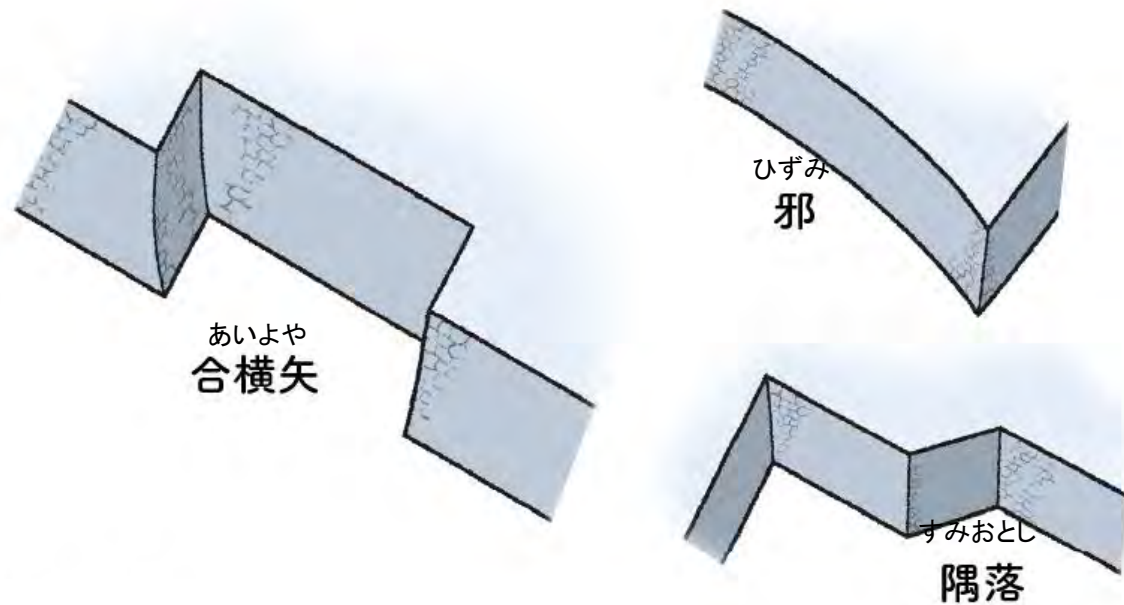
外枡形虎口 (そとますがたこぐち)

内枡形虎口 (うちますがたこぐち)





代表的な横矢形態



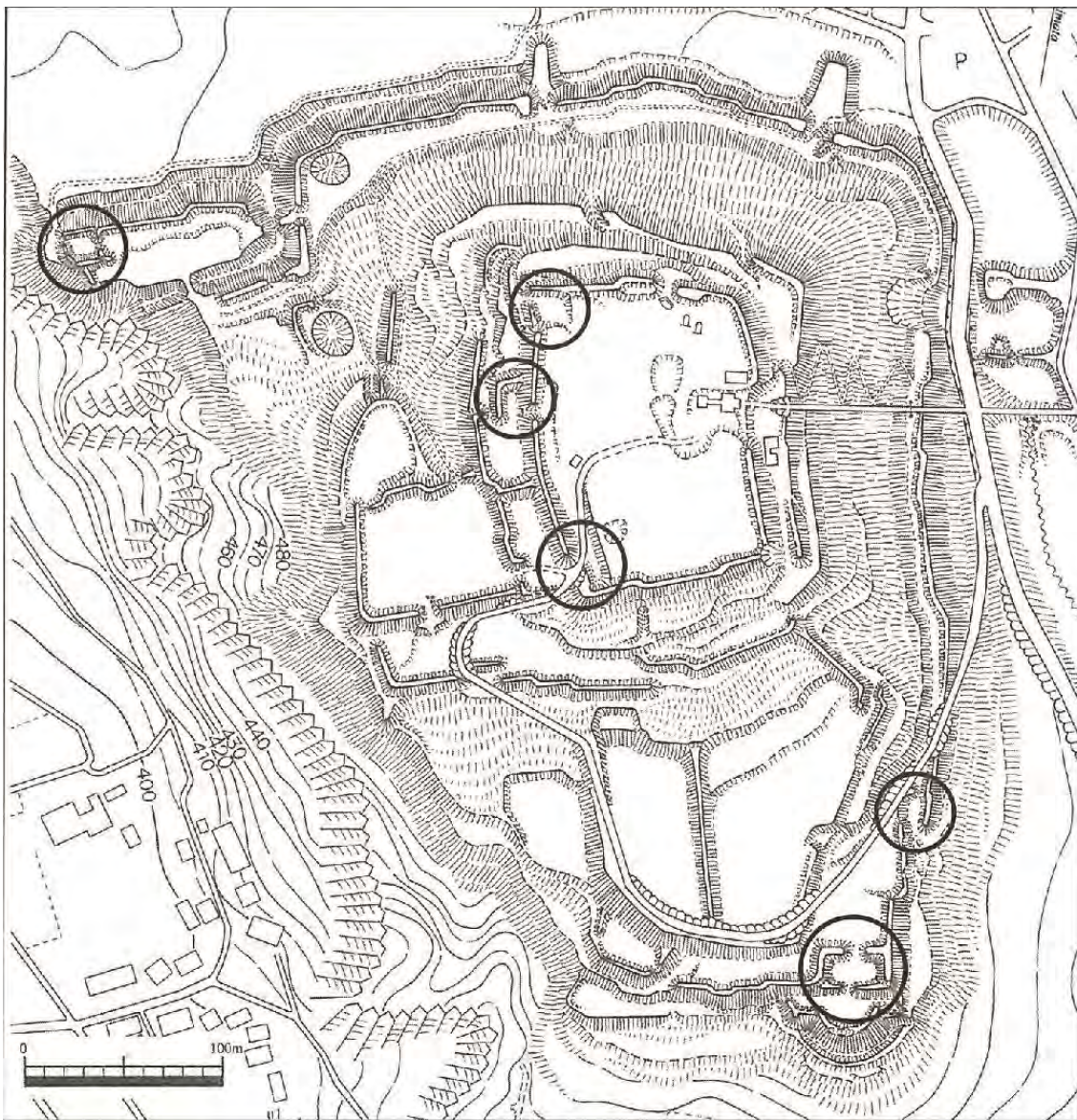
- ・「馬出」 堀を跨いだ虎口前方に造った小曲輪。馬出にいったん入城させてから虎口に入らせる。
東日本の角馬出は後北条氏に、丸馬出は武田氏の城郭によく見られる。
- ・重馬出 前後に2つ重ねた馬出。
- ・曲輪馬出 曲輪と同じ大きさの馬出を設けたもの。



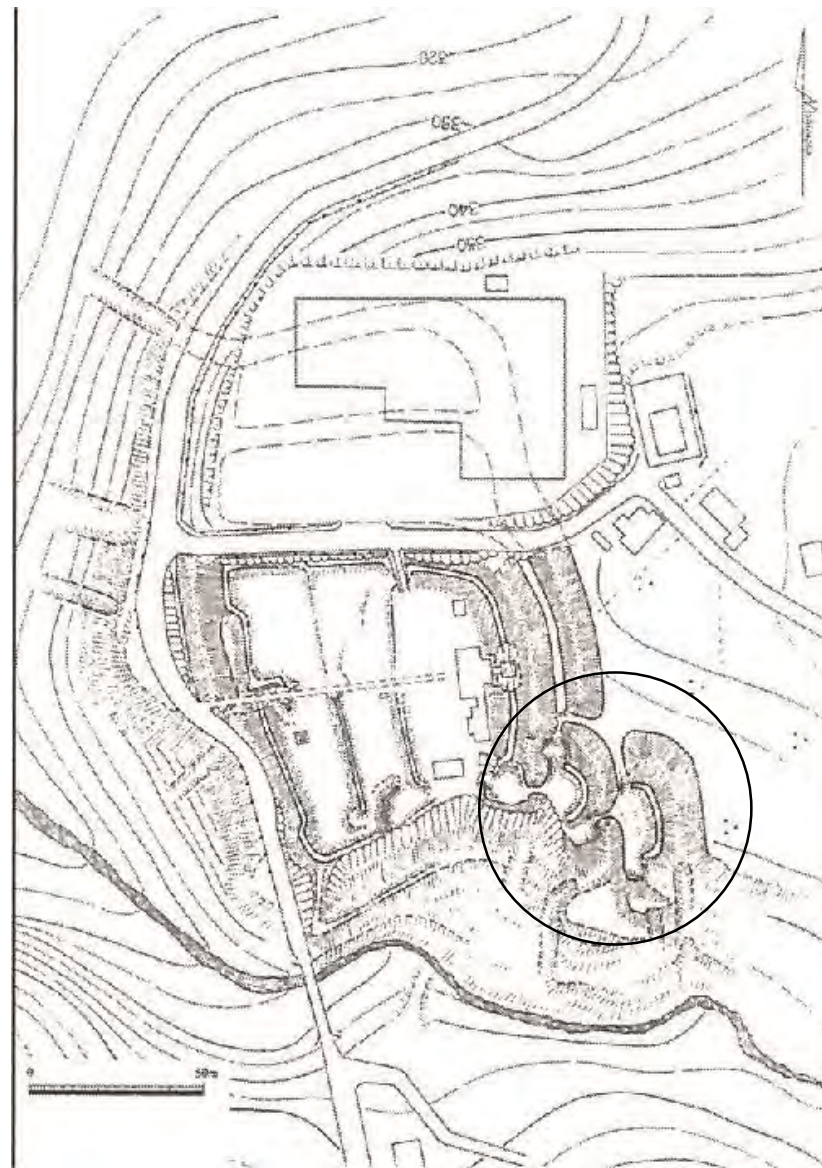
諏訪原城(静岡県)



鉢形城(埼玉)

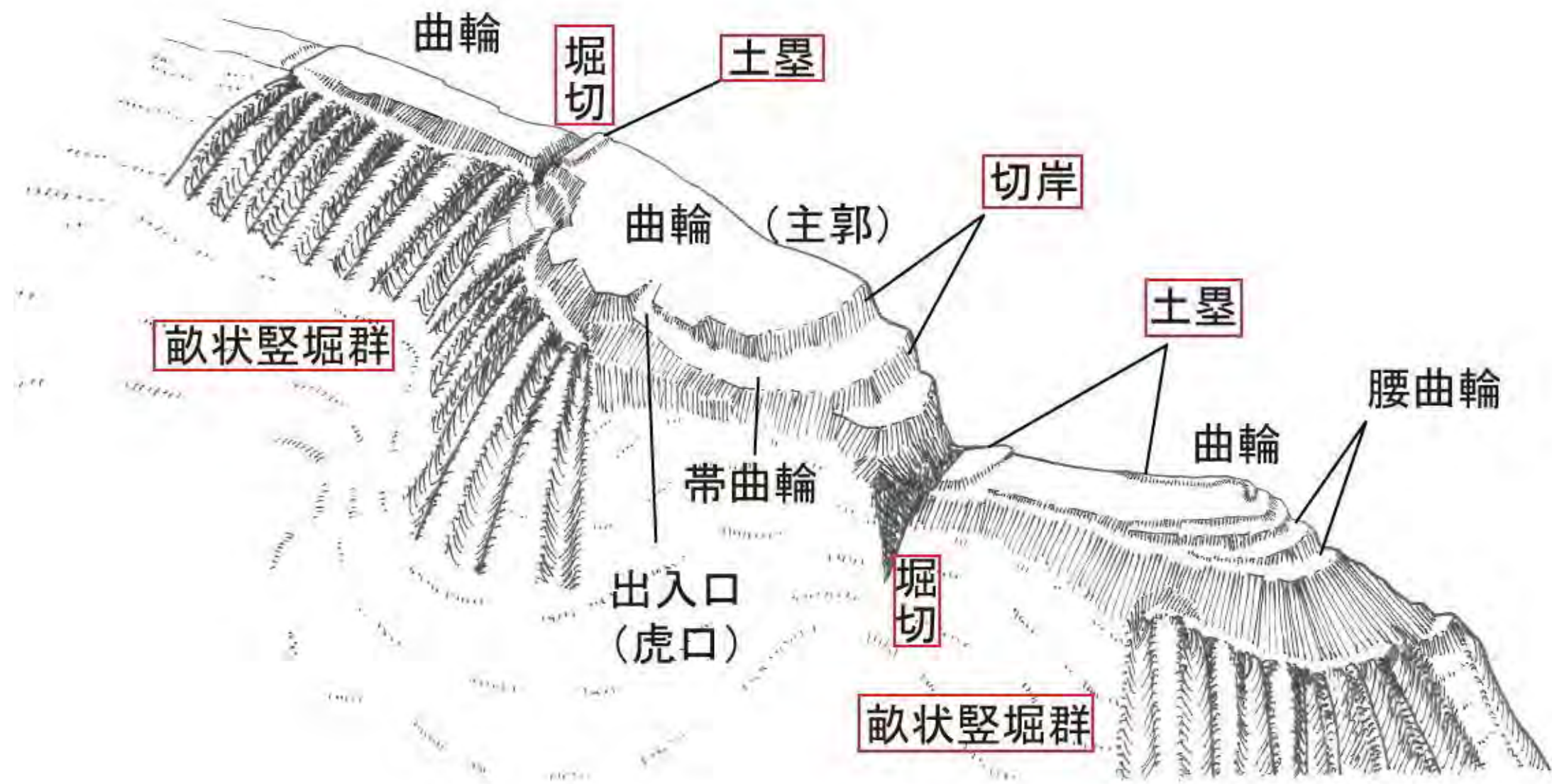


新府城(山梨県)



小長谷城(静岡県)

- ・「曲輪」 城を構成する地面を削って平らに均した区画。
 - ・ 腰曲輪 一つの曲輪の側面にウエストポーチのように設ける曲輪。
 - ・ 帯曲輪 帯状に細長く曲輪の側面を囲む曲輪。
 - ・ 出丸 城から離れた場所に作る独立した曲輪。「出曲輪」ともいう。
-
- ・「土塁」 堀を掘り、その土を盛り上げて壁としたもの。竪堀に伴う土塁を竪土塁という。



- ・「櫓」「矢倉」=矢をしまうための倉庫。「矢坐」=矢を射るための場所。戦国時代には、井楼(せいろう)櫓が用いられていたと考えられる。
- ・「櫓台」 櫓をのせるための土台。土塁の一部を張り出したり、土塁の幅を広く造る。見張りや射撃の場。

模擬井楼櫓(茨城県逆井城)

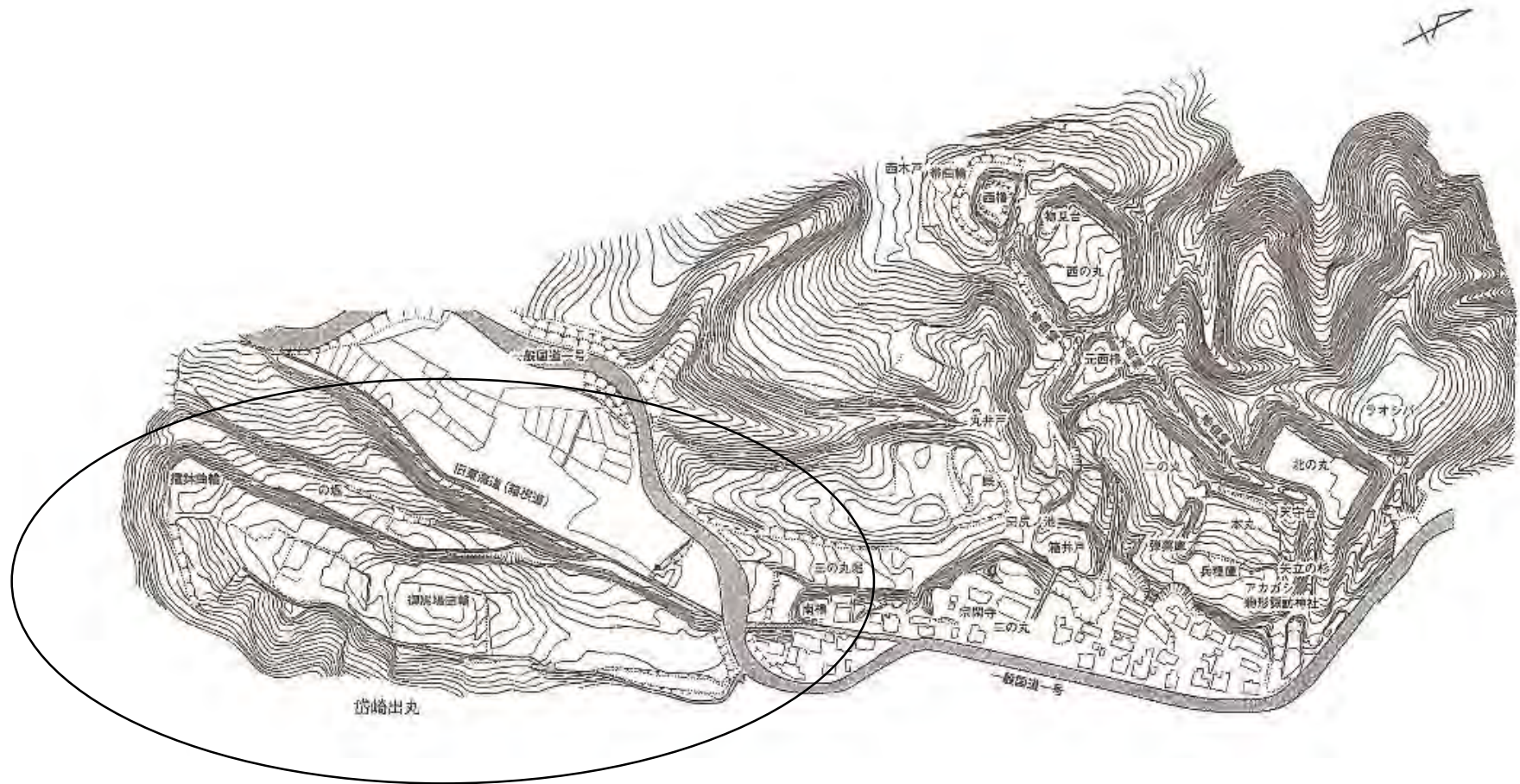




三崎城土塁(三浦市)



小机城櫓台(横浜市)



だいさき
山中城岱崎出丸(静岡県)

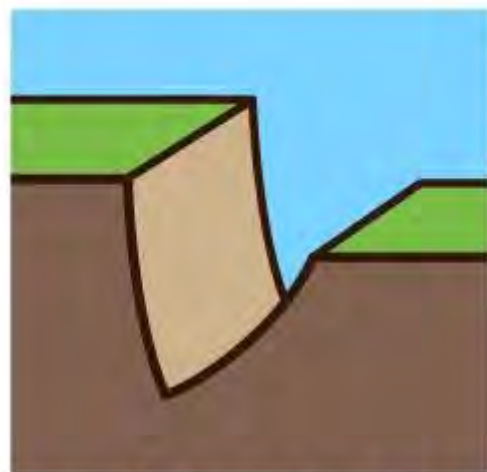
・「堀」 敵の侵入を防ぐため、古代から近世にわたって、城、寺、豪族の住居、集落、古墳などの周囲に掘られた溝。「空堀」・「水堀」

薬研堀 堀底がV字状の堀。漢方薬を粉末にするための薬研の底の形状から。空堀の主流。掘の幅と深さは同じくらいのものが多く3～6mほど。

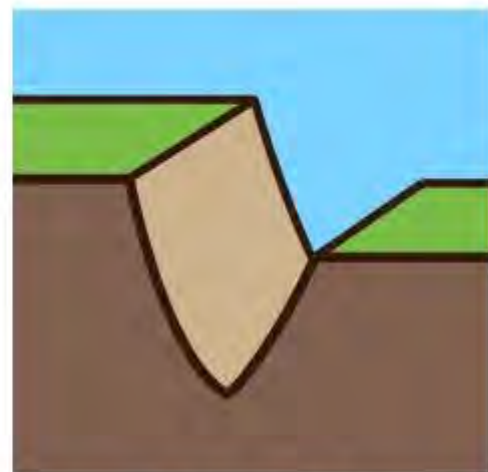
片薬研堀 薬研堀の場外側の斜面のみ傾斜を緩くしたもの。レの字。利点として対岸との距離をとれる。

箱堀 底が平らで台形を逆さにした断面をしている堀。通路としても利用可。

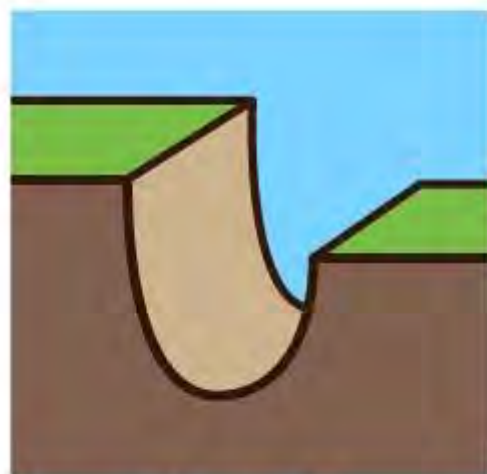
毛抜堀 底が丸みのあるU字になっている堀。



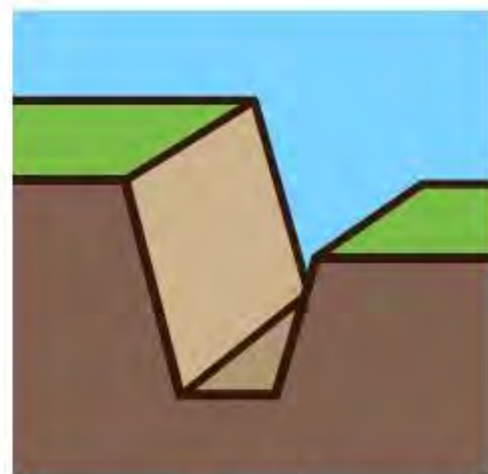
片藥研堀



藥研堀



毛拔堀



箱堀

障子堀 箱堀の底に敵が移動できないよう土手を障子の棧(さん)状に区画した堀。

畝堀 箱堀の堀底に土手を直交に設け、区画した堀。

豎堀 山の斜面と並行に掘った空堀。横移動を阻止する。

畝状豎堀 豎堀を何本も並列して並べた堀。

横堀 土塁に対し並行、斜面に対し直行に等高線上に沿って掘られた堀。山城において空堀とよばれる堀。縦移動を阻止する。

堀切 進入路を遮断する目的で尾根筋を断ち切るように掘られた空堀。そのまま豎堀にする場合もある。「二重堀切」



山中城障子堀(静岡県)



山中城畝堀(静岡県)

・「切岸」 山の斜面を削り落として人工的に造った崖。

・「土橋・木橋」 堀を渡る橋。「引橋」



杉山城切岸(埼玉県)



高麗山城堀切(大磯町)



平山城畝状豎堀(京都府)

腰越城二重堀切(埼玉県)



○曲輪(郭)配置の形態

- ・「輪郭式」 本丸を中心に置き、その周りを「回」の字型にぐるりと二の丸や三の丸が取り囲む配置。四方への防御力のバランスが取れているので、理想的な曲輪配置だといわれる。比較的平城に多くみられる。

- ・「円郭式」 輪郭式の変形として、本丸を中心に円形の曲輪を同心円状に囲む配置。实例は静岡県の田中城のみ。

- ・「**梯郭式**」 本丸の一方ないし三方を囲むように曲輪(二の丸)を置く配置。本丸は中心ではなく片寄った位置になる。本丸の背後を川や断崖とすることが多く、これによって輪郭式のように四方すべてを囲まずとも防御が可能に。自然地形を応用することが多いため平山城や山城向きで近世城郭の平山城に多くみられる。
- ・「**連郭式**」 本丸・曲輪(二の丸)など主要な曲輪を一直線上に連ねた配置。山の尾根上を利用した山城や平山城に多く見られる。

- ・「渦郭式」 本丸を中心に曲輪(二の丸・三の丸)を渦巻き状に置く配置。姫路城は本丸を中心に左巻き、江戸城は右巻きに渦状とする渦郭式を取り入れている。「螺旋式」ともいう。
- ・「群郭式」 シラス台地を侵食した谷を深い堀とし、独立性の高い曲輪が林立している配置。知覧城など。

輪郭式



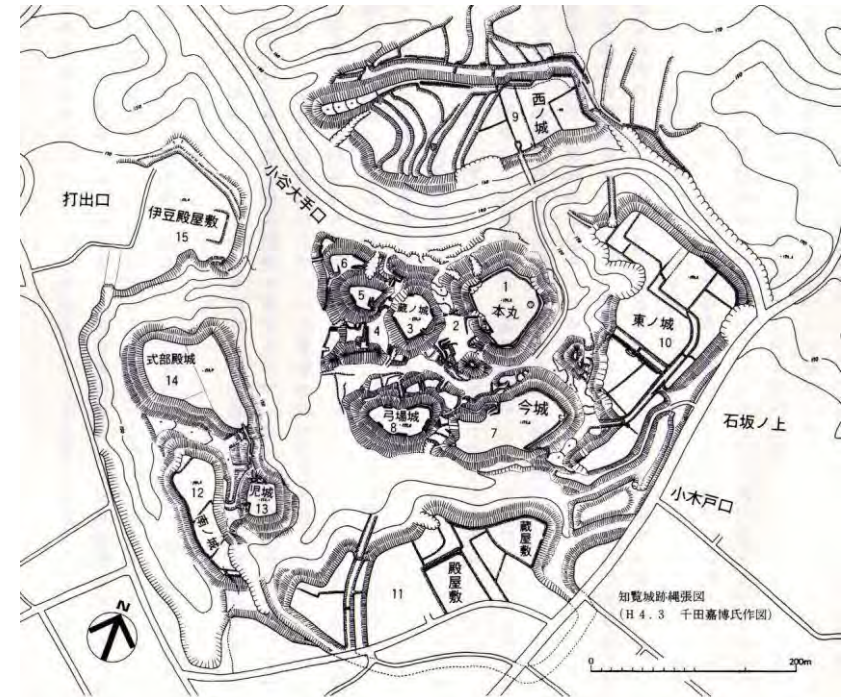
連郭式



梯郭式



渦郭式



群郭式(知覧城)

・ 4. 後北条氏の支城(図1)

・現在の神奈川県は、戦国時代の相模国一国と武蔵国の橋樹郡・都筑郡・久良岐(くらき)郡の三郡が該当。



図1 後北条氏の支配領域と主要な支城

初代 伊勢宗瑞(北条早雲) 康正2年(1456)～永正16年(1519)

- 初代当主 ～永正15年(1518年)
- 伊豆韮山城を本城



- 明応5年(1496)～文亀元年(1501)の間に、伊勢宗瑞(北条早雲)が大森氏から小田原城を奪取し、相模国西郡を領有。
- 永正9年(1512)には、三浦氏が守る岡崎城を攻略し、玉縄城を築城。相模中郡・東郡を収め、永正13年(1516)には新井城(三崎城)を攻略して三浦氏を滅亡させ、相模一國を領有。

二代 北条氏綱 長享元年(1487)～天文10年(1541)



- ・ 二代当主 永正15年(1518)～天文10年(1541年)
 - ・ 北条に改姓し、相模支配を確立
 - ・ 伊豆韮山城から小田原城を本城
-
- ・ 大永3年(1523)までに横浜・川崎地域の武蔵国領を収め、大永4年(1524)に扇谷上杉氏の江戸城を攻略。翌年に岩付城を占領。以後、三代氏康頃の河越夜戦(天文15年(1546))まで蕨(わらび)城や岩付城で攻防が繰り広げた(河越城の戦い)。
 - ・ 天文6年(1537)に河越城を奪取。武蔵国の支配を確定する。
- 以後、天正18年(1590)まで神奈川を後北条氏が領有。

三代 北条氏康 永正12年(1515)～元亀2年(1571)

- 三代当主 天文10年(1541)～永禄2年(1559)
- 天文20年(1551)、小田原城二の丸外郭完成
- 天文15年(1546)に武蔵国全域、弘治元年(1555)に上総・下総両国の一部、永禄2年(1559)に上野国の一部を平定



四代北条氏政 天文10年(1541)～天正18年(1590)

- ・ 四代当主 永禄2年(1559)～天正8年(1580)
- ・ 元亀2年(1571)頃までに低地部三の丸外郭造営
- ・ 永禄4年(1561)長尾景虎(上杉謙信)、永禄12年(1569)武田信玄が小田原城に攻め込む
→籠城戦により退ける
- ・ 天正5年(1577)に下総全域と下野・常陸の一部を平定



五代北条氏直 永禄5年(1562)～天正19年(1591)

- ・ 五代当主 天正8年(1580)～天正18年(1590)
- ・ 天正15年(1587)までに丘陵部三の丸外郭を造営
- ・ 豊臣秀吉の攻撃に備え周圀約9kmの総構を造営

- ・ 天正10年(1582)に下野国南西部、上野・信濃両国の大部分、甲斐国の一部を領有
→ 小田原北条氏最大の領土となる



- 天正18年(1590)秀吉が小田原城を包囲(石垣山一夜城)
- 3箇月後に氏直が無血開城し、氏政・氏照は切腹、氏直は高野山へ追放
→秀吉の天下統一
- 五代氏直は、天正19年(1591)に関東と近江に1万石の所領
→ 同年、29歳で没し、叔父の氏規が家督を継承し、河内狭山藩主(現大阪府大阪狭山市)として大名に列し、明治維新まで存続

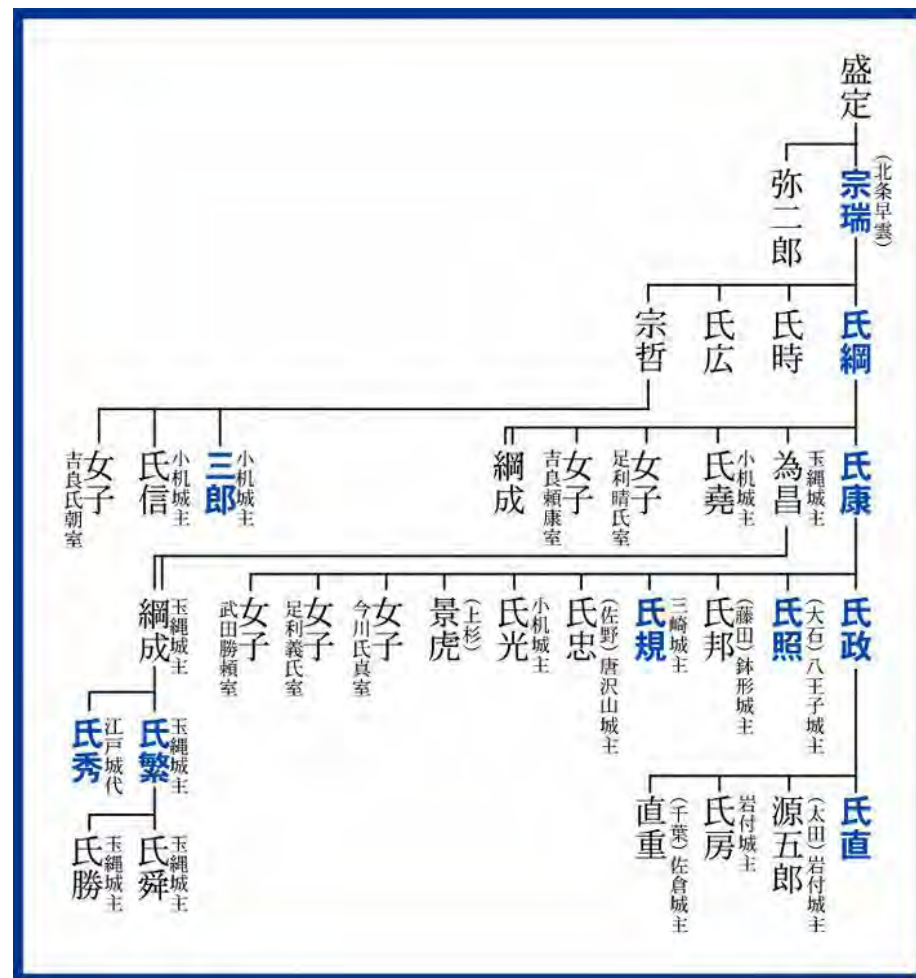
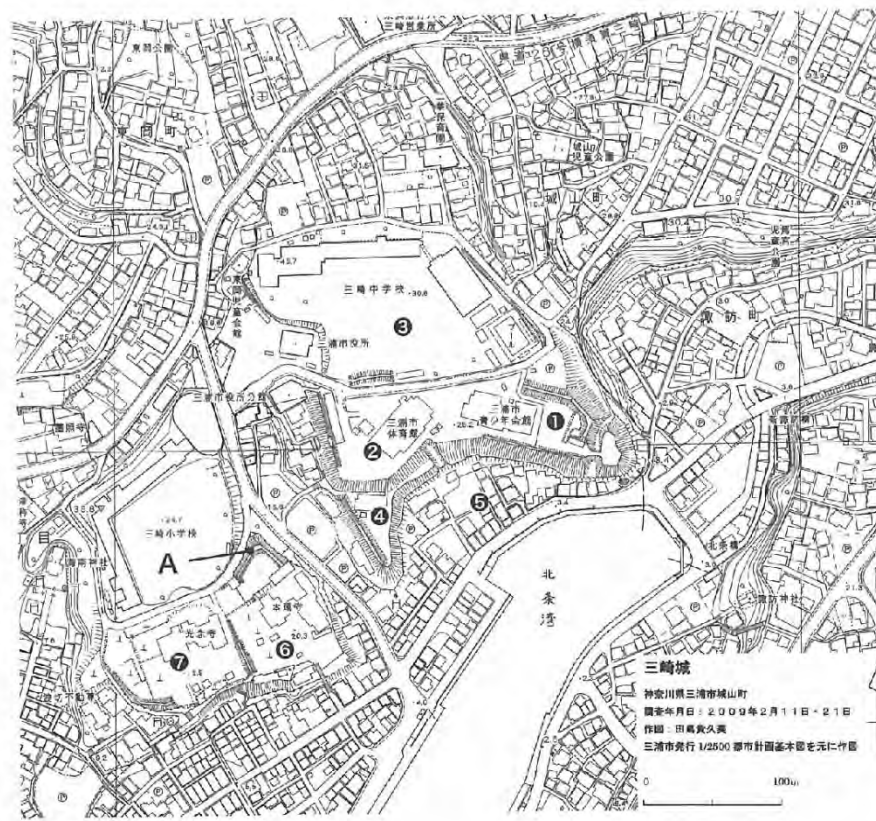


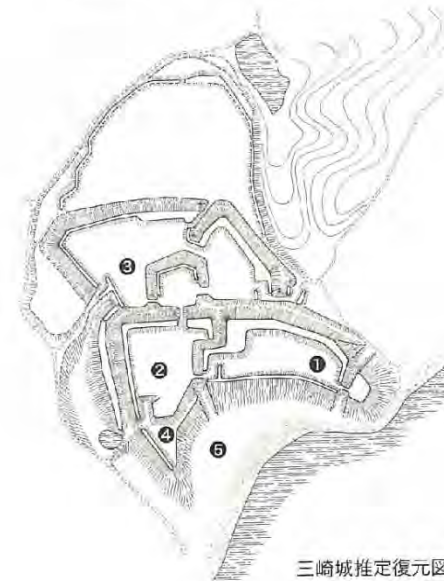
図2 後北条氏略系図



三崎城位置図



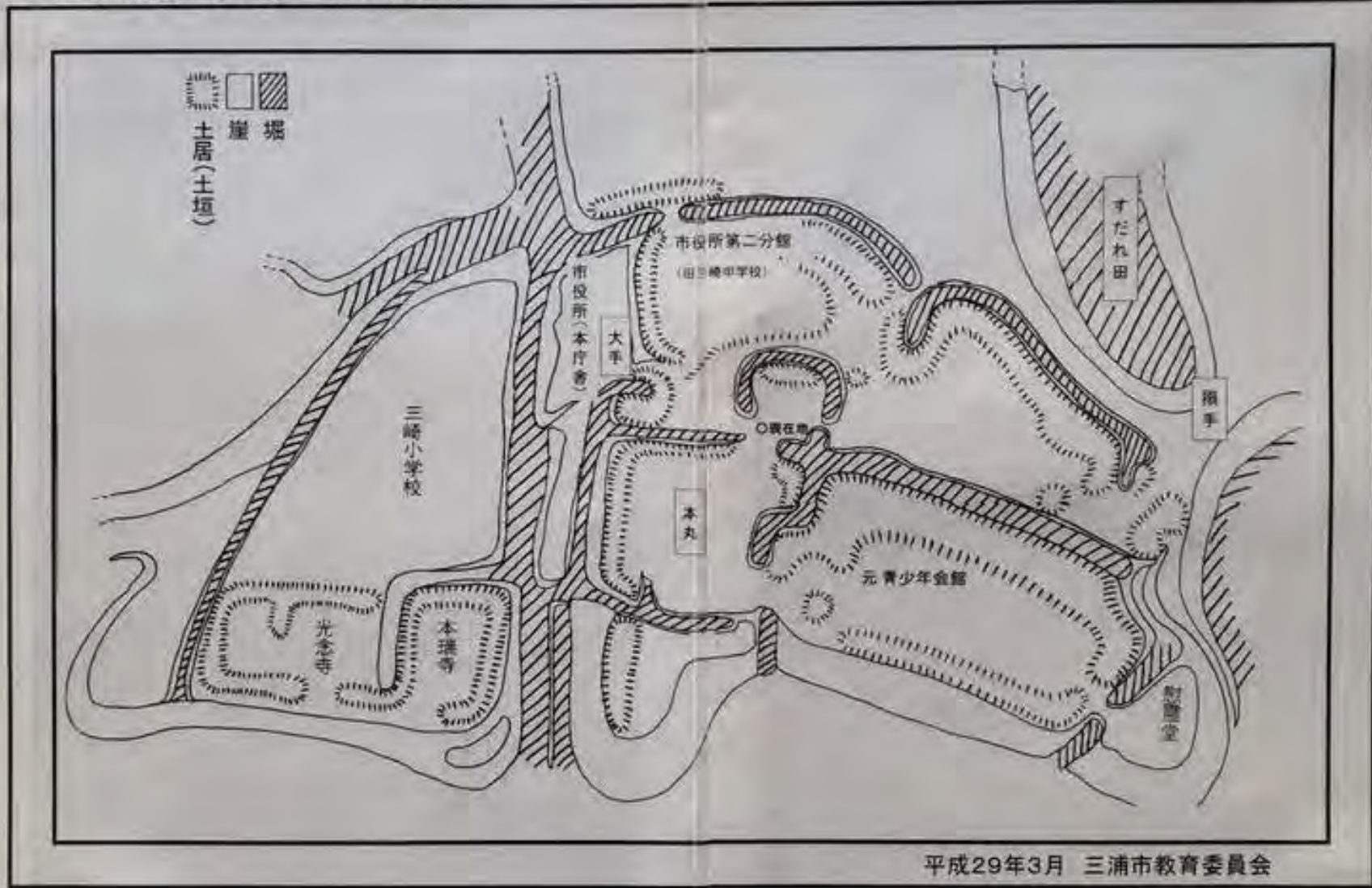
現況図



三崎城推定復元図

図3 三崎城の現況図及び推定復元図

「三崎城説明図」 三浦半島城郭史より



三崎城繩張図(赤星直忠氏作図)



北条湾(南東)より



玉縄城位置図



玉縄城 昭和35年(1960)撮影(北西から)



玉縄城と周辺の地形図

玉縄城復元縄張図

玉縄城発掘調査報告書(1994) P.97
 玉縄城中心域の地形(1957)を基図として
 米軍空中写真M76のNo.5394を判読し
 作成(曲輪配置は赤星直幸氏調査図を参照)
 2011年9月11日現地調査
 2011年9月26日作図
 2011年10月9日修正
 2012年6月3日再修正



図4 玉縄城復元縄張図



堀切(蹴鞠場下)

・清泉女学院図書館用地地点(齊木秀雄 1978)



遺構：溝・井戸・土壇・柵列・柱穴など

遺物：舶載陶磁器・国産陶磁器・かわらけ・鉄製品・漆器など

詳細：溝の底面には畝が設けられ、井戸は岩盤を方形に掘り込み、鎌倉石(凝灰質砂岩)を組み上げて構成。



- ・城廻字打越165地点(馬淵和雄 1986)
- 遺構:(頂部)堀切2条・曲輪2面・溝状遺構1
- (東斜面)豎堀6条
- (西斜面)豎堀3条
- 遺物:中世なし(縄文土器・礫)

・植木字相模陣374番他地点(大河内 勉ほか 1994)

遺構:(北部)堀切2条・曲輪2面・切岸状遺構ほか

(南部)掘立柱建築址8棟(1棟は建物中央に玉砂利)・礎石建物址
2棟・竈付き小方形竪穴遺構1棟・井戸など

遺物:(北部)なし

(南部)舶載陶磁器(白磁・青磁・染付)、国産陶磁器(瀬戸・美濃
系)、かわらけ、鉄製品、漆製品ほか(近世・縄文)





小机城位置図

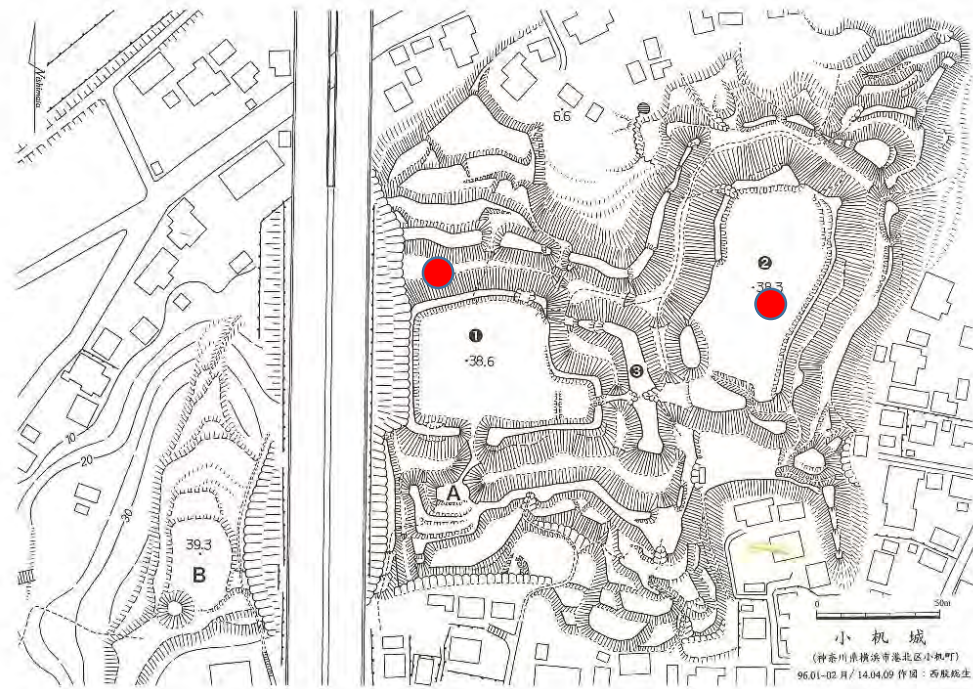


図5 小机城縄張図

・北空堀・東曲輪地点 試掘調査(横浜市教育委員会 2021)

遺構:(北空堀)空堀南側法面

(東曲輪)柱穴列

遺物:(北空堀)かわらけ

(東曲輪)陶磁器・土器(小破片)





第三京浜道路建設時に確認された空堀断面



小机城空堀



津久井城位置図

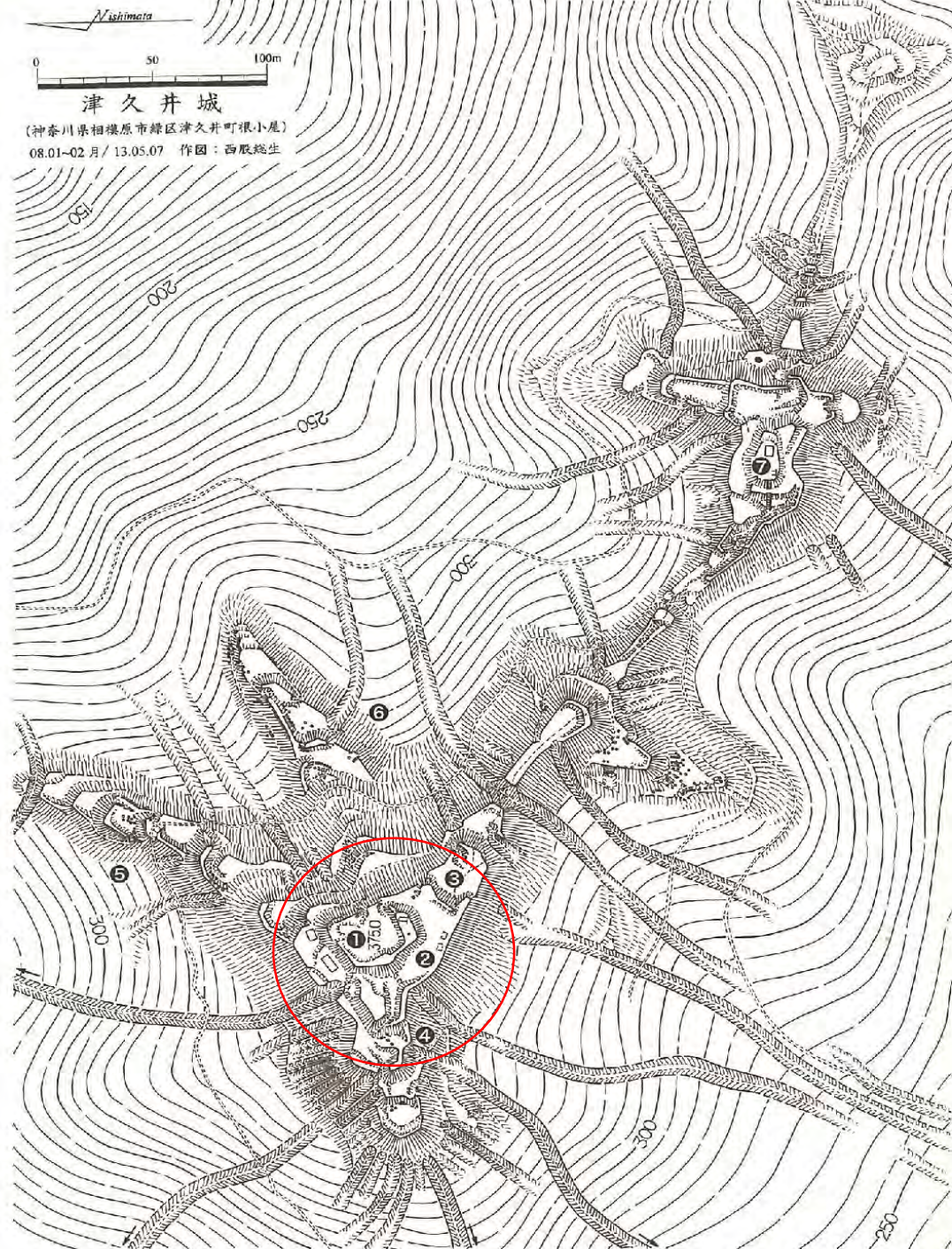
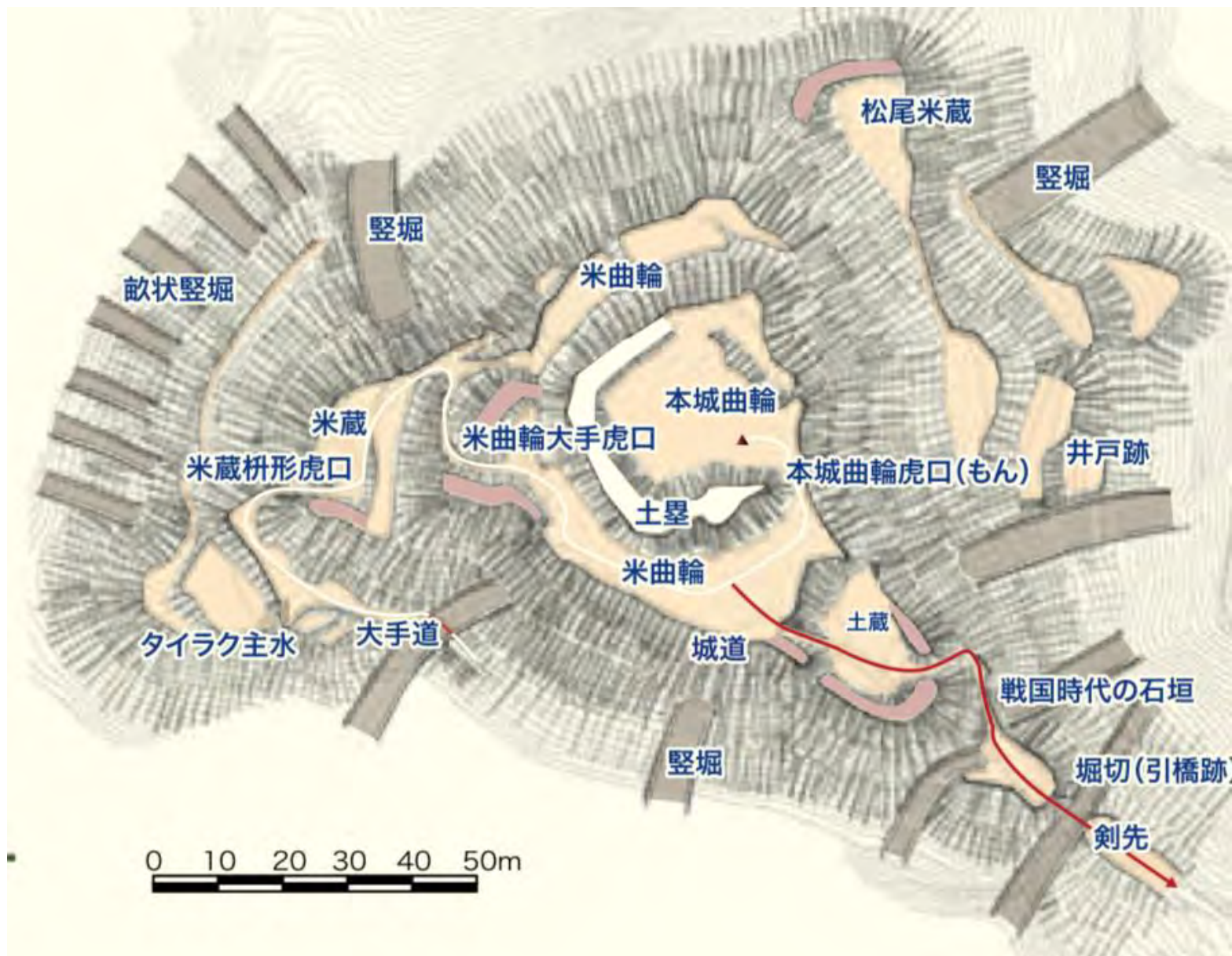


図6 津久井城縄張図



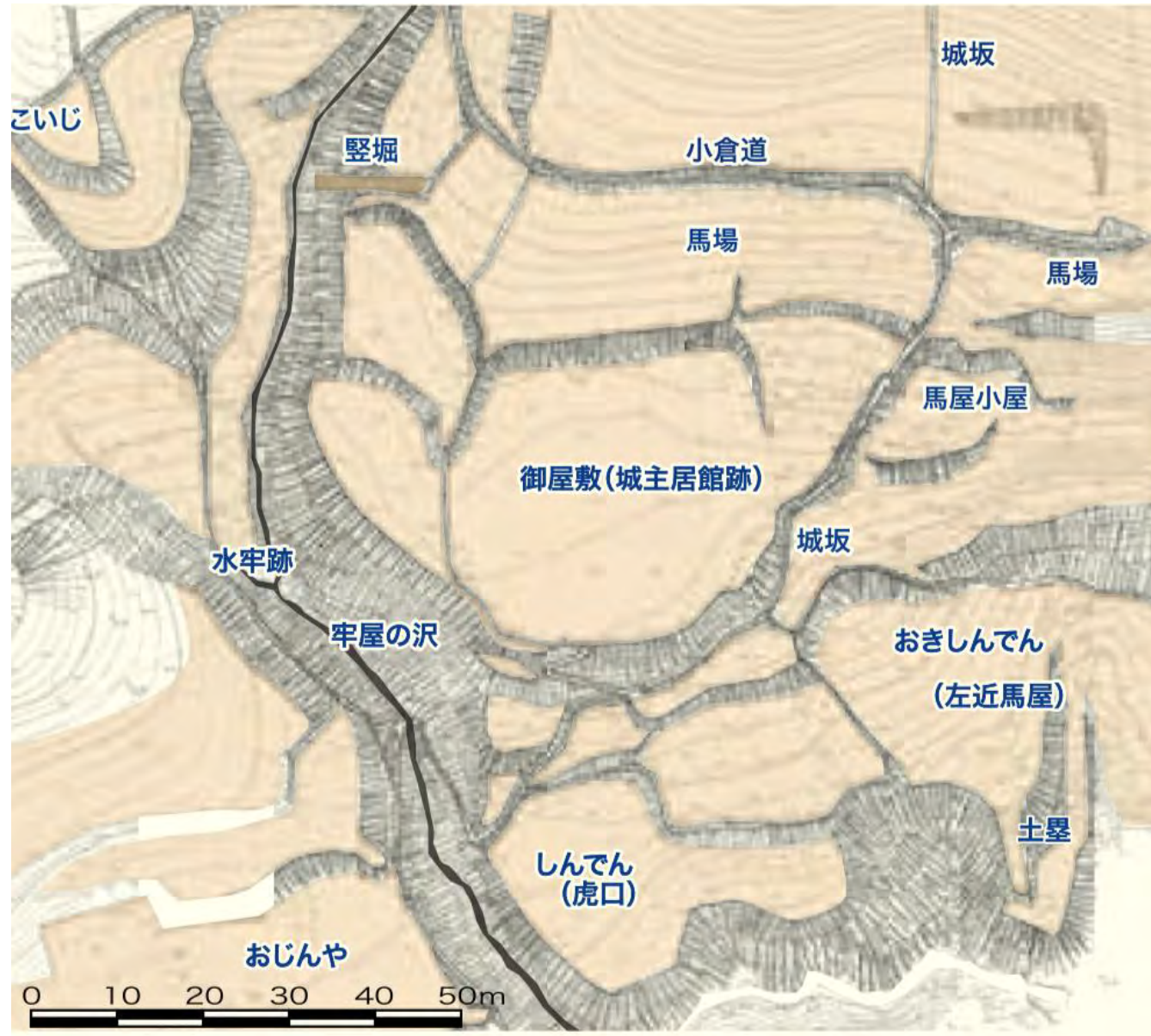
本城曲輪



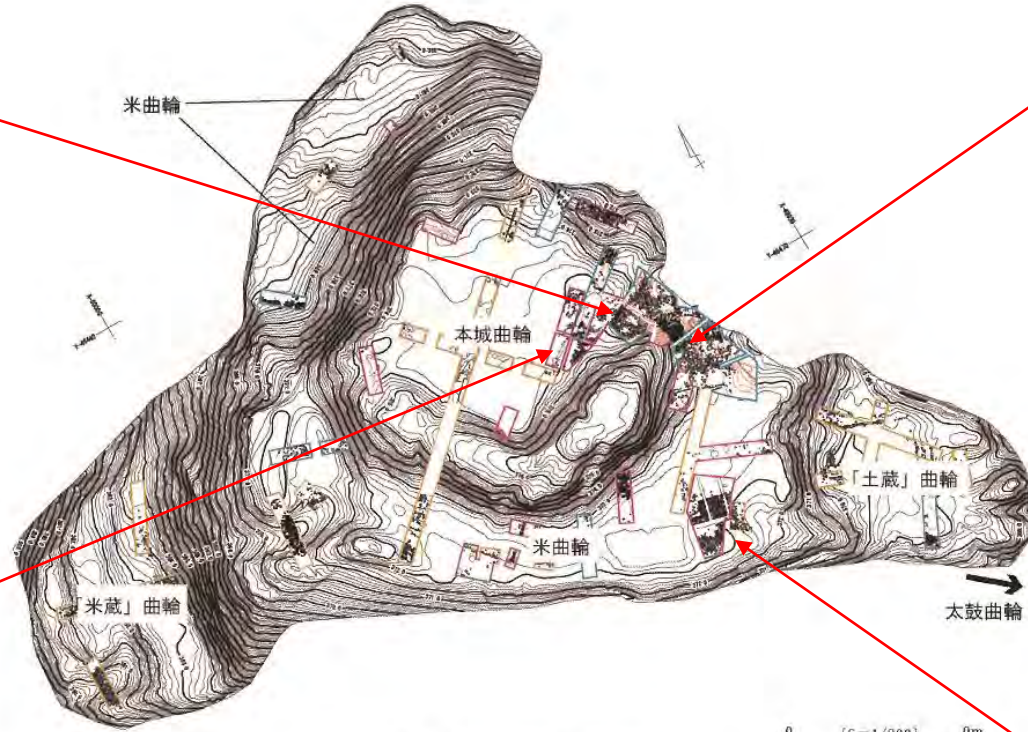
太鼓曲輪



飯縄曲輪



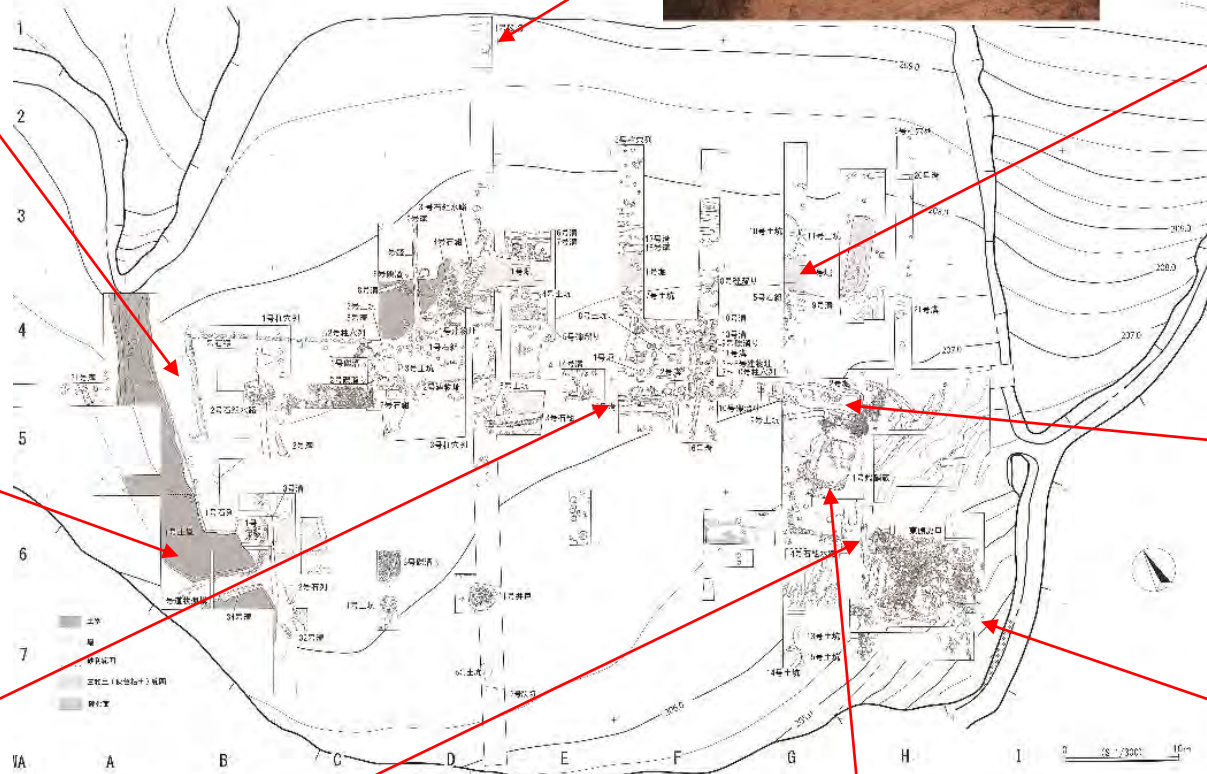
根小屋地区



第4図 本城曲輪群地区全体図



御屋敷曲輪



第19圖 御屋敷曲輪遺構配置図 (S=1/200)



おわりに

- ・ 神奈川における中世城郭の発掘調査は、本城である小田原城において数多く行われたことにより、様々な資料が蓄積されてきているが、神奈川県東部に位置する支城については、開発対象となることが少なく、また、縄文時代や古代の調査と比較すると遺物量も少ないため、情報量が少ない。
- ・ 昨年度より、小机城が試掘調査を実施し始めたことにより、また新たな発見が得られる可能性があり、神奈川の中世城郭=後北条の城郭ともいえるので、今後の調査に期待したい。